

音楽教育における学社連携の実践とその考察

前橋市城南公民館における実践を通しての検討

吉田 秀文・金井 彬

群馬大学教育実践研究 別刷

第41号 73～82頁 2024

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

音楽教育における学社連携の実践とその考察

前橋市城南公民館における実践を通しての検討

吉田 秀文¹⁾・金井 彬²⁾

1) 群馬大学共同教育学部音楽教育講座

2) 藤岡市立鬼石中学校

Practice and consideration of school-social cooperation in music education
Study through practice at Maebashi Jonan Community Center in maebashi city

Hidefumi YOSHIDA¹⁾, Akira KANAI²⁾

1) Cooperative Faculty of Education, Department of music, Gunma university.

2) Onishi junior high school, Fujioka city.

キーワード：音楽教育、学社連携、実践報告

Keywords: Music education, social education, practical report

(2023年10月23日受理)

1 はじめに

本稿は、社会教育における公民館事業で実施されている音楽活動と、学校教育における音楽科教育との連携を深めることで、相互補完的な学習を通して学習者の意欲を高めたり、地域の音楽教育振興に寄与したりする可能性を検討する。学社連携という語は、1949年の社会教育法に始まり、1965年ポール＝ラングランによる生涯教育の理念を契機に議論がさらに深まっていく。1980年代に生涯学習社会への移行が議論された頃は、「第3の教育改革」として度々登場した。しかし、その後は実際に十分な成果がどこまで上げられているか疑問の余地が残る状況と言える。すなわち、「学校音楽教育、校門を出ず」の語が払拭されるには、未だ解決すべき課題が残存していると言える。例えば、学校教育においては「働き方改革」が唱えられ、業務の効率化や仕分けが各学校で進められている。中学校音楽科はおよそ週に1時間の授業時数で、少ない授業時間の中で多くの学習内容や知識・技能を

扱い、生徒の音楽学習に対する主体性や愛好する心情の陶冶が求められるが、現場の教員からはどこまで達成できているのか、不安視する声も耳にする。

そこで、これらの解決策として、社会教育における公民館事業に連携を求め、相互に協力して取り組むことは、双方に成果をもたらす一案と考える。学校サイドからは、正課授業だけで零れ落ちてしまう部分が補強できること、公民館サイドでは、多くの児童や生徒、その保護者等を招き入れながら、結果として地域の教育力のレベルアップに貢献できること、が可能性として挙げられる。

こうした中で、前橋市の城南公民館では公民館事業「音楽物語」を継続して実践し、貴重な成果を築き上げてきた。本稿では、城南公民館での取り組みに依拠しながら、公民館側から学社連携に向けての成果や課題について検討することにした。

まず、城南公民館での「音楽物語」事業の概要を示し、参加者へのアンケート調査から実態を把握する。次に、企画や演奏に携わった方や主催者である公民館

長へのインタビュー調査を行い、事業を実施することに対する成果や意義を踏まえ、学社連携をより可能にするための課題や解決方法について考察する。そして最後に、学社連携・融合についての論考を基に、公民館事業「音楽物語」を通しての今後の課題等について考察したい。

2 前橋市城南公民館における実践事例とその研究・考察

2.1 公民館事業「音楽物語」の概要

「音楽物語～音楽と朗読と大きな紙芝居～」は、城南公民館副主幹の田中美貴子氏の「子どもたちが夢を感じられる講座にしたい」という発案によりスタートした。当館においては「青少年体験・チャレンジ活動」や「少年教室」といった、主に小中学生を中心に対象とした講座が開かれている。毎月発行している城南公民館報「城南」のみならず、城南地区の小中学校の全児童にチラシを配布したり、回覧板を用いたりして、地域に講座実施の周知をしている。来場者は小中学生から80代の方まで、幅広い年齢層の方々が来場している。

まず、はじめに講師陣を紹介する。朗読と物語で使用する紙芝居制作は先述の田中氏が、演奏は元群馬交響楽団ヴァイオリン奏者である井桁正樹氏がヴァイオリンとヴィオラを、ピアノ講師である峰岸小織氏がピアノを担当している。

講座の内容は2部構成をとり、第1部では「～音楽と朗読と大きな紙芝居～」という副題の下、「くるみ割り人形」や「ヘンゼルとグレーテル」、「ピーターとおおかみ」などの童話を中心に扱った。本講座の形態は「演奏会」を意識したものであり、出演者は館内のホール前方ステージにて演奏する。受講者は、ホールのステージ側前半分に子どもたち、その後ろに大人の椅子が分散させてある。このように分散させる意図は、「子どもが、子どもたちだけで演奏に集中できるようにするため」とされる。

副題にもあるように、大きな紙芝居と朗読に、音楽を伴いながら物語が進められていく。続く第2部では、井桁氏が講師となってワークショップを行う。リズムの違いを体験してみたり、実際にヴァイオリンとヴィオラを弾き分けてみたりと、体験的な活動が取り

入れられている。例えば、「ピーターとおおかみ」の様々な場面で演奏する楽曲について、ヴァイオリンとヴィオラのどちらで演奏するのが相応しいか、各々について子どもたちに質問を投げかけて、活発に問答のやり取りをしたりしていた。

この「音楽物語」は、これまで6年間で10作品以上を取り上げ、2022年11月現在で11回を数える。正に城南公民館における「名物講座」ともいえる。



「音楽物語 11」の講座の様子。
出演者はステージにて演奏する。
ステージ左から峰岸氏、井桁氏、田中氏。
2022年11月26日、筆者（金井）が撮影

2.2 アンケート及びインタビュー調査の概要

城南公民館で開催された2回の事業についてアンケート調査（2022年7月18日）、演奏者と館長からインタビュー調査（2022年11月26日）を実施した。

2.2.1 アンケート調査について（抜粋）

講座名：音楽物語10「ヘンゼルとグレーテル」

「バイオリンとピアノを聞きくらべてみよう！」

日時と場所：2022年7月18日、前橋市城南公民館ホール

参加者：子ども（幼小中学生）…28名、大人…38名

アンケート回収率：子ども（小中学生）28（100%）

大人21（55%）

全体49（74%）

質問1 あなたの学年を教えてください。

学年	年中	年長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1
人数	1	0	6	4	7	4	0	4	1

参加者は、小学生が中心で、その約4分の3である21名が小学校1～4年生であった。また、アンケートに回答はいただけなかったが、大人も38名参加された。その大方が子どもの保護者や関係者であると推測

される。中学生や高校生の参加者は中学1年生が1人だけで、ほとんど見込めなかった。

質問2 学校以外で音楽の勉強をしているか教えてください。

子ども	17
大人	5
全体	22

この結果から、子どもは学校外でも音楽に積極的に関わる機会が多く、反対に大人は少ない傾向にあると言える。学校外での子どもの音楽学習としては、「ピアノ」が14人、「ヴァイオリン」が3人、「アンサンブル」が1人、前橋市児童文化センターの合唱団に所属している子どもが3人であった。なお、ここでの回答は複数回答を含む。また、大人については、「ピアノ」が4人、「アンサンブル」が1人であった。

これらの結果から、大人は音楽学習に関わる機会が少ない傾向にあると推測されるが、そのような中でも、この講座に参加されていることから、興味や関心の高さが窺える。音楽に対する興味や関心のある大人も地域に少なからず存在することが見て取れる。

質問3 どうして今日この演奏会に参加しようと思いましたが（複数回答可）？

- ①お父さんお母さんにさそわれたから
子ども：12 大人：1
- ②学校の先生にすすめられたから
子ども：1 大人：0
- ③自分から行きたいと思ったから
子ども：11 大人：5
- ④この前も来たことがあったから
子ども：8 大人：9
- ⑤チラシ（インターネット）を見たから
子ども：11 大人13

今回の「演奏会」参加の理由は、子どもと大人で異なる傾向である事が分かった。

子どもの参加理由は主に「①両親に勧められた」以外にも「③自分から行きたいと思った」「⑤チラシを見たから」という理由が同程度であった。この背景としては、小学校で配布されたチラシを見たことや、そのチラシを見た両親に勧められたことによるのではな

いかと考える。

大人の参加理由は「⑤チラシを見たから」が半分を占めた。他にも、「③自分から行きたいと思った」「④この前も来たことがあった」が2割、3割を占めた。この背景としては、講座の印象のよさによる高いリピーター率だけでなく、地区の回覧板でチラシを見たことも要因として考えられる。

質問4 今回はバイオリンとピオラとピアノが登場しました。何かやってみたい楽器はありましたか？

子ども	ある：21	ない：7
大人	ある：13	ない：8
全体	ある：34	ない：15

子どもも大人も共に、演奏してみたい楽器があることが分かった。

また、今回の演奏会で登場した3種類の楽器以外にも、どんな楽器を演奏してみたいのか、興味を持っているのかについても、自由記述にて具体的な回答を求めた。すると、弦楽器の回答がチェロ、木管楽器の回答がフルート、クラリネット、サクソフォン、金管楽器の回答がトランペット、これ以外にもバスリコーダーやギターやドラム、小太鼓やハープ、更にはお箏や琵琶と邦楽器まで広い分野にわたる楽器の回答があった。多くの方々が興味を持っている楽器の分野は、それぞれ異なっている事が見て取れる。

「質問2」では、大人の方が音楽に積極的に関わる機会が少ないという回答を得たが、大人も子どもと同様に楽器演奏に興味や関心をもっている傾向にある事が分かった。

質問5 今日は何回目の参加ですか？

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回
子ども	11	3	3	4	0	0	1
大人	12	3	1	4	1	0	0
合計	23	6	4	8	1	0	1

この結果から、1回目の参加者が半数を占める事が分かった。回数が多くなるほど、リピーター率は下がりにつつあることが見て取れる。しかしながら、これまで5回と7回参加した人もいることも分かった。

以上、参加者のアンケート調査から見てきたこととしては、①日頃から音楽に触れる機会は、子どもよりも大人の方が少ない、②演奏してみたい楽器など、音楽に対する興味や関心は子どもも大人も同程度に高い、③全体的にリピーター率は下がるものの、2回以上継続して講座に参加する者もいる、④近隣小学校の児童へのチラシ配布や、地域の回覧板での広報が効果的である、⑤自ら参加したいと思う意欲ある参加者がある程度地域に存在している、の5点が主な傾向として明らかになった。この内容は学社連携を実践する際、地域の人々に対してどのような方略で臨むことが適しているか判断する指針となり得よう。

2.2.2 講座実践者へのインタビュー調査について

2022年11月26日に開かれた「音楽物語11」の際に、講座の主催者であり発起人の田中美貴子氏、弦楽器の演奏家である井桁正樹氏にお話を伺う事ができた。講座に対する意識や考え方、準備すべき事項や手順など、実施に必要なことなどを伺った。

まず「音楽物語」の企画立案、実施に至った経緯について、田中氏と井桁氏に伺った。

○田中氏：「子どもたちが夢を感じられる講座にしたい」この思いがすべての始まりです。そして井桁先生に講師を依頼しました。このときは講座の内容は未定でした。井桁先生が2台のピアノとお話の載った楽譜を見つけ、この「音楽物語」が始まりました。当初は1回だけの講座の予定でしたが、ピアニストの峰岸先生が「次（の演目）は何になさいます？」とおっしゃった一言で、第2回目の開催が決定。以降、2022年現在6年間10作品、11回目を迎えている「城南音楽物語」となりました。

○井桁氏：あくまで依頼を受けて始まりました。しかし、回数を重ねていくうちに、演奏するこちらにも変化がおきてきました。それは子どもたちのストレートな反応とこちらの心境との複雑な化学反応のようなものです。ですから3人の息が徐々に近づいて行きました。

開始当初は1度限りの講座の予定であった。しかし、「演奏会」での参加者や子どもたちの反応を通じて、講師の方々の思いや考えに変化を与え、これらが

一致したからこそ、当講座は継続できていると言える。正に、主催者側である演奏と参加者側である聴衆が一体となり、音楽を通して相互にコミュニケーションがなされ、相乗効果を上げていたことが考えられる。子どもの演奏に集中して聞き入る様子に演奏者が触発されたことも重要な点と言える。

次に、この「演奏会」の準備や臨む際に意識している事について伺った。以下の通り、主なポイントをまとめて示す。

○田中氏

- ・紙芝居と朗読、チラシとプログラム作成を担当。演目によってはシナリオも書く。
- ・シナリオを書く際は、子どもにわかりやすい言葉を使いつつ、大人も楽しめるように表現を考えている。
- ・チラシとプログラムは誰でも読めるように漢字にルビを振る。
- ・プログラムは子どもが持ちやすいように、A5サイズの小さいものを作成する。
- ・紙芝居は子どもたちが喜んでくれる姿を思い起こしながら思いを込めて描いている。
- ・色弱の子どもに配慮をするが、それを完全に把握したうえで考慮しきれないのが悩みである。せめて、紙芝居の表紙のタイトルだけでも見えやすいよう、色の選択を考えて描いている。
- ・本番の時は子どもたちの反応を見ながら進めるよう心掛けている。子どもたちの目を見ながら朗読し、集中力が切れそうな子どもがいたら、あえて立ち上がった紙芝居をめくり、動きに変化をつけたりする。

○井桁氏

- ・「音楽物語」は、あくまでも演奏会として考えている。自分の音が聴衆に対して通用しているかどうか？この音で良いのかどうか？と常に自問自答をしている。
- ・どんな演奏会でもやりがいを感じる事ができなければ、それはお客様に対して失礼である。お客様にはすぐにバレてしまう。

プログラムのサイズや内容、紙芝居の作成、本番で子どもたちの集中力が切れないようにする工夫や、演

奏がお客様の耳や心に、どのように届いているかどうか等、講座に来場された方のために様々な工夫がなされている事が分かる。これらの準備は、非常に長い時間と大変な労力がかかるものであるが、参加者の方に楽しんでもらいたいという一心のもとに取り組まれているものであると分かる。これらの意識はまさに、実際に音楽家が演奏会に臨むときの意識と同様の考え方であり、観客と対峙しながら真剣に迫るものである。

続いて、このインタビューの中で、「演奏会」でのやりがいや、印象に残った場面についても田中氏に伺った。以下、概要を示す。

○田中氏：どの演奏会も印象深いのですが、中でも2020年7月に開催した「メリーポピンズ」が印象に残っています。この年の2月からコロナ禍となり世界中のすべてが止まりました。(中略) そんな中、ようやく少しずつ動き始めたそのタイミングでの開催でした。一曲目が終わると会場から拍手が起こったのです。これはいままで一度もなかったことです。「ああ、みなさんの心が生の音楽を求めているんだ」と感激し、同時に音楽を生演奏で聞くことの大切さをあらためて感じました。感想の中に「これを聞けば、音楽をきらいな人もすぐに好きになると思う」というのがありました。小学校低学年の子どもからです。子どもの感性の豊さに心が震えました。

改めて、音楽に宿る力の神秘さを感じる体験談であると言える。実際に足を運び、対面で生の演奏を聴いて感動していただいたからこそ、コロナ禍も乗り越えて当講座は6年間以上も継続されているのだと言える。

さらに、田中氏に、学校教育と社会教育の連携に必要な取り組みや工夫について、講座の企画立案者、公民館職員、出演者としての意見を伺った。

学社連携に向けて必要な事項について、以下の通り、その回答の概要を示す。

○学校と職員のコミュニケーションが大切である。日ごろから交流を持つことが重要である。

→城南公民館では、地域の行事の際（コロナ禍前まで）、中学校ボランティアをお願いしていた。

→先生と職員が初めてやりとりする時はぎこちない

が、誠意をもって対応すると次第に心が開かれていき、次からお互い遠慮なく意見を言うことができる。

→「知っている人」になればいろいろ提案したり、受けたり、意見を交わしやすくなる。

○担当の先生だけでなく、他の先生方にも職員の存在を知ってもらおう

→学校へ行く機会が増えれば、顔を覚えてもらえる。「見たことのある人」になっておけば、いざ学校と連携するときに学校へ行きやすくなる。

→挨拶を交わすだけでも大切なコミュニケーションになる。日ごろの積み重ねがあって初めて連携できる。

○企画内容は、話し合いを重ねて決める

→学校、公民館、講師それぞれのねらいや思いがあるから、話し合いを重ねて良いものを作っていくことが必要。このときに「目的」をはっきりさせておくと、目指すところが明確になるので、話し合いやすくなる。

講座の企画の際には、公民館と学校と外部講師とで、ひとつの目的に向かって何度も話し合いを重ねることが必要であることが指摘された。また、連携に際しては日頃からのコミュニケーションが大事であるという事であった。これは至極当然なことであるが、実際に公民館職員と学校の教職員が実際に関わる機会を増やし、日頃より連携を高めておくことが重要と言える。しかし、現状を鑑みた場合、このことは決して容易いことではない、まずは、相互の協力的な関係づくりを強化できるように意識改革を促すことが重要と考える。

触れ合う機会が少しでも増えれば、挨拶など通してコミュニケーション作りが上手く図れるにちがいない。

最後に、田中氏と井桁氏から、公民館事業「音楽物語」の今後の展望について伺った。

○田中氏：「音楽物語」は紙芝居があるということが特徴の一つです。それを生かすためには、小さな空間での開催が望ましい。これからの時代、地域や友人、家族など、小さなコミュニティが重要になると考えています。「音楽物語」は規模も

内容も、これからの時代に合うのではと期待します。「音楽物語」を通じて一人でも多くの子どもに本物の音楽を間近で感じてもらいたい。いろいろな体験をして、感性を育てながら大人になってもらいたい。また、子どもだけでなく、大人を対象とした企画も行っているの、こちらも活動の地域を広げ回数を増やしていきたいと思いません。

○井桁氏：3人の気持ちがそろそろ限り、今後も続けたいと願っています。

現在、日本は少子高齢化社会が進み、地域のコミュニティが希薄になりつつある。地域における教育力の向上や、社会に開かれた教育課程を実現するためにも、主体的・対話的で深い学びにより、子どもたちにたくましく生きる力を育んでもらうためにも、地域のコミュニティはさらに重要になる。このような目標や目的を実現するためにも、学社の相互補完的な連携は必要であり、その場に音楽を取り入れることもまた必要不可欠であると考えます。

2.2.3 公民館館長へのインタビューから見える学社連携の足掛かりと今後の展望

本項は、前橋市城南公民館館長の石橋敬一氏へのインタビューで得られた知見の紹介である。2022年11月26日に開かれた「音楽物語11」にてお話を伺う事ができた。相互補完的な学社連携のためにどのような事項が必要になるのか、どのような事項が現状の課題点であるのか、公民館長として、また公民館職員としての意見を伺った。

まず、学校教育と社会教育の相互補完的な連携のためにどのような事項が必要かについてお話を伺った。これに対して以下のように学校の現状を取り巻く課題点を指摘された。

- ・学社連携を学校の先生の求めるのは、働き方改革の問題もあって実際は難しいのでは？
- ・「地域も学校と連携して、学校も地域に出て一緒にやりましょう」という方針だったが、やればやるほど教員の働く環境が悪化して行って、それが現状に繋がっている。
- ・公民館運営推進委員会の中で「教員の配置の数がず

いぶん少ない、減った」という話になった。

- ・城南地区管内においても、定員に満たしていない学校の方が多い。
- ・休みも取りづらいし、先生の働く環境も良くないのでは。
- ・本業に影響するような障害が改善できないと、新たな地域との取り組みも難しいかも。

公民館職員の立場からでも、学校教育現場が抱える働き方に関する課題点や障壁はまだまだ山積しているように見えることが述べられた。これらの障壁をどのように改善、解消していくかは、今後の大きな課題点と言える。

その上で、学社連携を進めるうえで必要なこと、留意すべき点についてご意見を伺った。以下にまとめて示す。

○学社連携を進める上で必要なことや留意点

- ・地域と学校を結びつけるような学習事業のきっかけづくりや、やりたいことがあってもやれないというような時は、是非公民館に何かいい方法はないかと相談してほしい。
- ・校長先生や教頭先生が地域との窓口になるので、そういうところに提案をして、学校としてこういうことをしたいという事を地域に伝えるには、公民館が良い窓口になる。
- ・しかし、職員も人事異動があるので、その取り組みにずっと係ることが難しい面もある
- ・学校と公民館だけでなく、地域の方にも入ってもらいたい。ある程度活動が定着してきたら、地域の方に地域と学校の連携の役目を担ってもらう形が望ましい。

学社連携を進める際には、学校と公民館だけでなく、そこに居住される地域の方々に協力していただく事、生徒を地域に出して活躍させ、地域の人々を学校に受け入れるような姿勢で取り組むことの重要性をお話いただいた。

また同時に、実際に事業や授業の計画を策定する際に、必要なことや留意点についてもお話しいただいた。以下にまとめて示す。

○事業計画、授業計画を進めるうえでの必要なことや留意点

- ・いかに手間をかけず、効率よくできるかというのがポイント。
- ・伝統行事を例えに挙げると、これらはほとんどが究極のマンネリ化しているのでは。
- ・だけど、「誰でもできて、同じことの繰り返し。だから続いていく」という捉え方もできる。
- ・同じカリキュラムで何回も何年もやって行くとなると、「マンネリだ」と言われるかもしれない。でも、そうしないと地域としてやっていけないかも。
- ・最初からあれもこれもと考えるよりも、まずはスタート。やってみないと課題も見えてこない。
- ・スタートしてからいろいろ改善案を考える。やりたいたいこと10のうち6出来れば良い方。
- ・どんなに良い物をつくったとしても、なるべくみんなに負担にならない形でないと継続できない。

まずは始めてみることに、手間は省くこと、そして「これさえすれば成り立つ」というある程度のテンプレートを考えるべきであるというアドバイスを頂くことができた。

また、学社連携のために個人ができることについて、教職員の参加の重要性についても述べられていた。

○石橋氏：「地域と学校で連携するといっても、先生方も地域のことが分からない場合がほとんど。地域のことを分かるには、仕事としてではなく、普段の生活の中で積極的に出てもらう方が良いです。」「先生方の中にも地域との連携が大事だと思っている人もいます。連携事業においては先生の協力は不可欠です。」

学校は地域の教育を担う拠点であるとも言える。学校に通う児童や生徒が地域とどのような関わりがあるか、家庭での生活の様子について窺うことは、学校での授業実践や様々な活動や行事などをデザインする際にも大きなヒントを提示することもある。しかし、個人情報観の観点や教員本来の業務の多忙さから、どこまで取り組めるかは課題が残ると考える。

最後に、学社連携を進めることの意義についてお話

いただいた。

○石橋氏：「地域に出ることは良いことだと思います。授業内容は覚えてないですが、自分自身も子どもの頃に地域に出たことはすごく覚えています。」「また、自分が住んでいる所の地域の活動が一番勉強になる気がしますね。地域の活動に対して、『自分にとってあまり関係ない』という考えになっちゃうと地域への愛着も生まれませんから、生まれた地域の事を知っておくことが必要だと思います。ベースがあるからこそ、知らない地域との比較ができます。そのおかげで『地元は良いな』と思えることもあるのではないのでしょうか。」「ほかの地域で、地元よりも良い取り組みしていることがあれば、地元に戻ったときにも生かれますし、地域の取り組みを学校の方に還元してもらえたら良いなと思います。」

これらの話から、学社連携においては地域を挙げて取り組むことや、学校の教員も地域や家庭の様子に関心を持つことの重要性が示される結果となった。実際に連携する時も、地域の人々に地域の諸事項を知ってもらい、地元へ愛着を持ってもらう取り組みをすることで、学習者自身に新たな視点や見方が加わり、他の地域の良さを理解する時の一助として必要であることも示された。

3. 全体的考察

前節までの調査結果と考察を踏まえ、本節では笹沼隆志氏の論述に依拠しながら全体考察を述べてみたい。

笹沼（1999）は、生涯学習社会への移行のため、切り口を「学社連携・融合」と「学校のスリム化」から論じている。少々時期が経った論考ではあるが、現在においても状況は多く改善したと言い切れる訳でもなく、本稿において十分示唆的であると考えられる。

まず、笹沼氏は学校教育を取り巻く現状と問題点を取り上げ、生涯学習体系への移行の必要性から学社連携の意識が教職員にあり、環境面としてはほぼ整っていること、その一方で日々公務の多忙化により現実的には課題が山積すること、さらに「教育は学校で

するものだ」という根強い社会的な認識や要請があること、等を指摘した。とりわけ、「家庭教育力の欠如」については「家庭で本来行われるべき基本的生活習慣の指導は学校が担わざるを得なくなっている面が増えてきている」（笹沼、1999、124頁）と述べ、生涯学習体系への移行には学校・家庭・地域の教育力が必要で、特に家庭での教育力が大切であるとしている。このことは、先述のアンケート調査から、音楽の習い事に関して子どもより大人の割合が低い結果からその関連が窺える。子育て世代である保護者にとってまずは、基本的な生活の基盤を支えるため、経済的な側面を優先する必要がある。家庭における日々の多忙さを考えると家庭での教育力を高めるのは決して容易な事項ではないと言える。

次に笹沼氏は、「学社連携・融合」と「学校のスリム化」について論考している。「学社連携・融合」とは、「学校と地域社会（社会教育関係部所を指す時もある）がともに手を携えて、子どもたちや学習者を支援していこうという考え方であり、地域教材や人材の活用、地域の行事への子どもたちの参加・地域の活性化等を主として意味する」（笹沼、1999、124頁）、「学校のスリム化」は「教育における学校至上主義を廃し、学校本来の職務を越えて抱え込みすぎた仕事を、地域社会や家庭に戻し、それぞれの責任の元に子どもを育てていくことである」（笹沼、1999、125頁）とそ

れぞれ述べている。そのうえで、社会教育サイド、学校教育サイドから予想されるメリットやデメリットを取り上げて検討している。例えば、「学社連携・融合」について両者ともメリットがあると感じながらも、学校教育サイドとして子どもを学校から外に出すことによる新たな指導や留意点が負担増となる。「場所的なもの・時間的なもの・空間的なものへの対処が明確化されていない現状では新たな仕事を抱え込むという面を持ち合わせており、学校の負担増となりやすい」（笹沼、1999、125頁）ことが課題となる。笹沼氏は両者についてグラフ（図1、図2）によって明示し、各々どちらが先かではなく、同時進行で行うべきだと述べている。指摘の通り、「学校のスリム化」のために「学社連携・融合」を推進するのではなくこれはホリスティックに捉えていくべきであると考えている。しかし、先述の通り、家庭での教育力向上は経済的負担や時間的拘束等が、学校教育でも業務の仕分け作業と分担、引き受けられる新たな部所の整備等が必要であり、これらを同時に実施することは不可能に近い側面も否めない。この問題は、教育機関だけでなく、国や社会全体で取り組むべき、大きな意識改革であるとも言える。

こうした負の側面も踏まえながら、より前進するための喫緊の方策として考えられる事項を示してみた。

[学社連携・融合]

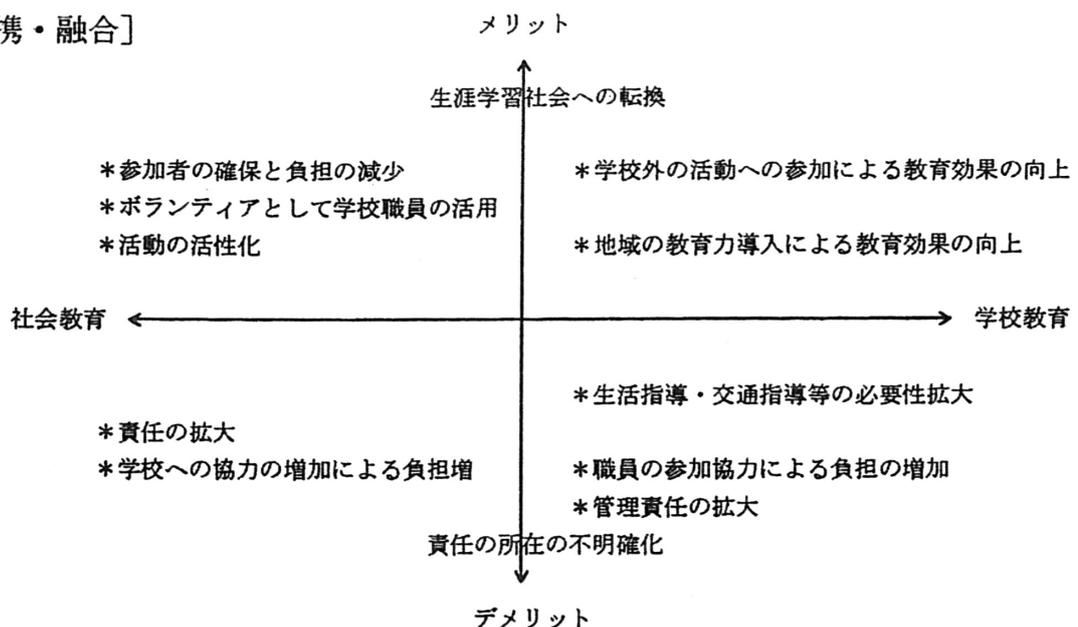


図1 「学社連携・融合のメリットとデメリット」（笹沼、1999年、126頁より転写）

[学校のスリム化]

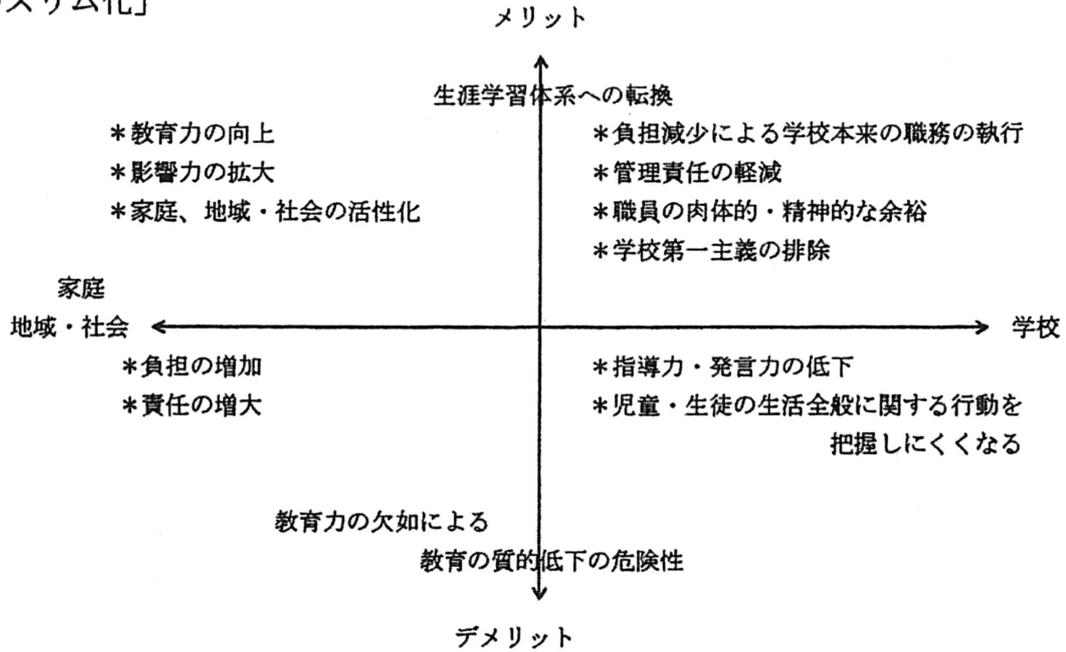


図2 「学校のスリム化のメリットとデメリット」(笹沼、1999年、126頁より転写)

1. 公民館と地域の学校による定期的な集まりを持つこと。

→毎年少なくとも1回は両機関で集まり、情報交換や協力の可能性について検討する。対面で難しい場合はオンラインでもよい。

2. 公民館側の事業等催しについて学校側に宣伝を積極的に行う。

→土曜日や日曜日、長期休暇中の実施であれば、学校の教職員への負担は軽減できる。むしろ、家族で参加することで家庭の教育力向上が期待できる。さらに、家庭でのコミュニケーションが高まれば、他の事項についても相乗効果が表れよう。

3. 公民館事業を継続して実施する。

→事業を継続して実施することで、地域に根差した学習効果が期待できる。時間はかかるかもしれないが、石橋氏が述べていたように、まずはできることから始め、お互い負担感を軽減することを配慮して行えば、次第に地域の教育力に貢献出来る。公民館の名物事業となれば、他の地域にも波及して宣伝効果をもたらし、広がりを見せることとなる。

4. マンネリ化に拘らないこと

→3で述べたことと関連するが、何か特別なことをしようと考えすぎないことが大切と考える。マン

ネリ化と批判されることも想像できるが、何か大きな事業を試みると無理が生じたり、かえって負担増になったりすることが予想される。先述の笹沼氏は、「学社連携・融合」について、山本恒夫氏の「従来から言われてきた連携は、学校教育と社会教育がそれぞれの立場で協力することであり、お互いが共有するところがあるわけではなかった」とする知見に触れている。志向すべきは融合にあると言えるが、まずは連携・協力から始め、機が熟するのを待つことが重要と考える。現状を顧み、状況を鑑みながら、無理なく地域の方々の要請に応じていく姿勢を大切にすべきと考える。

5. 地域や家庭の教育力向上に資するための方略を検討する。

→地域や家庭の教育力向上のためにどのような要望があるのか、これを阻む要因を除去するために何が可能か、等を検討することが求められる。公民館が地域の住民にとって「たまり場」となるような、そんな場になるとよいと感じる。

4. おわりに

本稿は、学社連携としての音楽科教育を考察するた

め、前橋市城南公民館での事業「音楽物語」を通してアンケート調査やインタビュー調査を行い、主に社会教育サイドから検討した。公民館事業「音楽物語」がどのように開始され、現在まで11回を数えるまで継続的に開催してきた経緯や課題等を明らかにした。また、当該公民館館長からのインタビュー調査では、改めて学社連携に向けての課題や難しさをご指摘いただいた。無理なくいかに継続していくかに価値を見いだし、しっかり地固めをすることの大切さが示された。また、笹沼氏の論考に基づき考察を行い、「学社連携・融合」「学校のスリム化」に向けて教育がこれまで学校に任されてきたことを内省的に改め、地域や家庭の教育力向上や社会における意識改革の必要性に鑑みて、検討を行った。

生涯学社会への移行が提言されて30年が経過するにもかかわらず、教育の中心は学校が担っている。教職員の働き方改革が叫ばれ、学校のスリム化が進んでいるが、そこから零れ落ちた学習内容や事項を地域や家庭がしっかり受け止めてフォローしていかないと本末転倒になりかねない。コロナ禍の影響でオンライン教育やタブレットの導入などが一気に加速し、これらは教育界に大きな変革をもたらした。状況は変わっても主役である子どもの存在をしっかりと見つめ寄り添いながら教育改革をしていかねばならない。

今後は、学社連携や生涯学習に関する理論的背景

(佐藤や佐々木を中心に)も視野に入れながら、引き続き追究して参りたい。

追記

本稿は、金井彬の群馬大学教育学部卒業論文「社会教育における音楽事業と音楽教育の効果に関する研究—公民館事業の考察を通して—」の一部に大幅な修正と追加を行ったものである。

謝辞

本稿の執筆にあたって、アンケート調査のご協力を頂いた「音楽物語10」の49名の参加者の皆様と、講座担当主任の狩野真之氏、講座の発案と講師をされている副主幹の田中美貴子氏、元群馬交響楽団ヴァイオラ奏者の井桁正樹氏、ピアノ講師の峰岸小織氏、そして館長の石橋敬一氏に感謝致します。

参考文献

- 佐々木英和、「生涯学習実践の学習課題に関する理論的考察—A. H. マズローの欲求理論の批判的継承を軸として—」、生涯学習・社会教育学研究、第20号、1996年、21～30頁。
- 笹沼隆志、「生涯学習社会における学校教育の在り方をめぐると一試論—学社連携・融合の理論的考察を切り口にして—」、宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告6-7合併号、1999年、119～131頁。
- 佐藤晴雄、「学社連携における子どもの『学び』の変容と意義—庄司和晃氏の『認識の三段階連関理論』に着眼して—」、日本の社会教育46号、2002年、51～63頁。

(よしだ ひでふみ・かない あきら)